
ドカラン王国の反乱

夢見がちな少女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドカラン王国の反乱

【Nコード】

N4345K

【作者名】

夢見がちな少女

【あらすじ】

ドカラン王国に反乱軍が攻めてくる。

鎮庄のため向かった王子率いる王国軍は敗れる。

それによって王国の王 ドマは娘を逃がし 自ら戦うことを決意。反乱軍に勝利するドマだが追手は娘に向かっていく。

娘メーテは、反乱軍に追われ 恋人であり側近でもあるレシオンは捨て身で戦いを挑んでいく。

プロローグ

ドカラン王国。

世界の3大陸のもっとも大きな大陸、南コーザ大陸の中で最も領土を広げたドカラン民族の築いた王国。

そこには、500万人の民族が生活をし、最強と言われる総勢約4万の兵士を抱える軍隊を持つ、巨大国であった。

その帝国の国王はドマ。若くして妻を亡くし、その亡き王妃との間には二人の子供が居た。

メーテ姫とメディン王子。

ドマは軍兵のうち、最も優れた剣術を持つ、リーバーを自らの第一側近に据え、準じて優れた武術を持ったバフガス、レシオンをそれぞれ、姫と王子の側近にして、護衛させるように命じた。

ドカラン王国は、繁栄を極め、城下町は賑わいと活気があり、永劫に続くかと思われた平和な時間。

しかし、それも僅か10年という歳月でレジスタンスを名乗る反乱軍によって失われることになった。

反乱軍は、猛烈な勢いと進軍速度で王国に迫って来ていた。

王国の領土内の砦の一つが有った、城から北東に1500キロの位置にある街、ケーテが反乱軍により壊滅させられる。

事態を重く見た、ドマは息子であるメディンに出陣命令を出した。メディンは王国の中でも優れた武術を身に付けており、人望とともに、ドマの後を継ぐことを約束された身でもあった。

その戦いは、ドカラン王国が、それから500年後、隣国のジーバに滅ぼされるまでに起きた戦争の中で、最も大きな対戦となった。

1章 王子の出立

王子の出立の命令が下って、半日。

日が傾きかけて、夕日の光が大きな窓から降り注いでいた。

きれいな夕日の光景とは裏腹に、メーテ姫はいらついていた。

「お父様つてば、頭おかしいんじゃないっ？なんで反乱軍を相手するのにメディンが行かなきゃならないのよっ。楽勝とは言われてるけど、メディンにもしものことあったらどうする気よっ」

自室のベットの上のクッションを放り投げて、苛立ちを表現するが、肝心の父と弟は軍の会議中とあって、怒りをぶつける相手も居なかった。

その時、コンコンとノック音がした。

「はい？」

メーテは面倒くさそうに返事をした。

「あの・・・メーテ様、リディナです・・・」

申し訳なさそうに、弱弱しい声でリディナという少女が名乗った。

「あ・・・入って良いわよ」

メーテはリディナを中へ入るように言った。

小さなリボンをした可愛らしい少女は、弟メディンの恋人でもあった。

メディンを産んですぐに亡くなった母の代わりに、同じころに子を出産したリディナの母が乳母となったので、乳兄妹でもあり、一緒にメディンと遊ぶ友達でもあり、両親ともに、王国に仕える身でもあることから、リディナ自体も10を過ぎる頃には王国に仕えてくれるようになっていた。

「メーテ様・・・あの・・・メディン様は・・・」

言いにくそうにもじもじとリディナが告げる。

「3日後に出兵するそうよ。だからここには居ないわ。作戦会議とやらが長引いてるそうよ」

いらいらする気持ちを丸出しに投げるように告げるメーテを見て、リディナはさらに俯いた。

「あ、・・・いや、ごめん。リディナに苛立ってるわけじゃないわ。

何？」

用件を話せとばかりに姫は傲慢にリディナに告げた。

「・・・あの・・・す、すみません・・・あの・・・こんなこと聞いてもって、あの・・・思うんですけど、メディン様は・・・どのような反乱軍と戦うことになるんでしょうか？」

反乱軍の情報などは、軍事の機密情報なので、軍平以外に仕えて居るものたちの耳には入らない。メディンを心配して気にしているのだろう。

だが、聞かれたメーテも、軍事には関わってないため、詳しい情報は持っていない。弟や父から、僅かな粗筋が聞けるだけだった。

「私も詳しいことは知らないけど、まあ時間も掛からずどうとでもつぶせるくらいだとは聞いて居るわ。どこまでメディンが話すかどうかはわからないけど、会議が終わったら、メディンに直接聞いた方がきつと詳しく知ってるわよ。ただ、・・・怪我しない戦いつてのはないから、帰って来たときのために治療薬でも用意しとくと良いわ」

自らも、そう言いきると落ち着いてきた。

そう、怪我はしたとしても、弟が死ぬことはない。

でも、何故か胸の不安は抜けなかった。

「は、はい、メーテ様・・・そうなのですね、安心しました・・・ただ、今までどんな小競り合いが有っても、メディン様が出兵なさるなんてなかったもので・・・心配してしまつて・・・あの・・・失礼します。お時間かけて申し訳なかったですっ」

そう言うつと泣きそうな顔でリディナは飛び出していった。

廊下を走るように横切ると、リディナは、どん、と人にぶつかった。

「あつ！す、すみません・・・」

リディナが謝ると、相手の男、レシオンは軽く微笑んだ。

飛び出して行ったリディナをちょっとだけ心配になって見て居たメーテはその新たな来訪者にさらに、慚然になった。

「なんの用よ？」

新たな来訪者レシオンは、つんと顎を反らす姫君に、軽い会釈をして部屋に入った。

「作戦会議が終わったようですよ、姫。私は今回は軍兵だけけど同行は命じられませんでした。あらましは聞かせて頂きましたので、お伝えにきました」

そう言うレシオンを、部屋のソファーに座らせた。

レシオンは、父も認めた軍兵の一人であり、父がメーテの護衛として付けた男だった。

弟と違い、軍事にかかわることがないメーテにとっては、護衛と言うより軍事連絡係と化していた。

「相手のレジスタンスを名乗る反乱軍は約四千という話。しかし、砦を構えていた兵も約四千だったのですが、かなりの勢いで押されたそうなのです。戦ったときにわが軍を従えたのは、バジャ將軍。優れた指揮ぶりは評価されていたのですが・・・いとも簡単に破れたという事実は確かに有ってはならないことでした。」

今回は、全出兵を1万とし、それぞれに武將を置いた小さな隊を作り、戦うという予定だそうです。本来は、武將が一人出兵すればよいと思えるでしょうが、その武將を指揮する人材として、メディン様が出兵されるようですね」

その話をつらつらと言われ、メーテは混乱しかけた。

「1万・・・すごい数ね・・・。その砦を守っていたバジャ將軍は確か・・・レシオンの叔父さんよね・・・。私も聞いたことが有るわ。お父様も認める武將と・・・。」

1万と言う数・・・弟は大丈夫・・・と思いたいけれど、何だか却って不安になったような微妙な気持ちになった。

「会議でお疲れで少し休むと言っておられました。きっと、メディン様も後でいらっしゃいますよ」

苛々する気持ちを隠さないメーテに対して、レシオンが、笑って告げた。

「大丈夫ですよ、メーテ様。反乱軍とぶつかる予定なのは、北東700キロ先の街、ドーバーです。そこには、わが軍の砦も小さいながらにあります。今回は出兵する兵だけでなく、その砦の兵、五百も加えて戦うことになっていますし、砦からの攻防ですので、こちらの軍がより有利になるように、砦の改装も行っています」
そう言うのと、ソファアを立ち、レシオンがメーテに何かを手渡した。

反射的に受け取った。2粒の小さな白い薬。

「眠れない時に、姫の好きなハーブティと共に飲みください」
気が起つと決まって睡眠障害を起こす姫君に、睡眠薬を手渡した。
レシオンは退出しようとドアを開けた。

メーテは、「待つて」とレシオンを呼び止めた。

「大丈夫よ、レシオン。飲んだら癖になるでしょ。だから飲まないで寝ることにしてるのよ、ただ……ちょっとだけ、我儘言うとな、レシオン」

そう言うのと、メーテはレシオンに身をすり寄せた。

「メーテ様？」

レシオンは困惑した表情でメーテを見た。

「おいおい、なにドア開けっぱなしで欲情してんだよ、姉さんはさく！」

メーテが慌てて振り返ると、部屋の前の廊下に呆れ顔で、弟、メーデインが立っていた。

「別に父さんはさ、俺とリディナも認めてくれるんだから、レシオンと仲良かろうが認めてくれるだろうけどさ、ドアくらい閉めようぜ」

メーデインが楽しそうな顔で入ってきてドアを閉めた。

「ま、だいたいのはレシオンが話したんだろうから、俺が姉さんに話すことも無いかな。部屋帰って、リディナと俺もらぶらぶした方が良いかもねえくらぶらぶ」『ちょっとだけ、我儘言うとな、リディナ』「なーんってねえく！」

ぺろりと舌を出して、メディンがメーテをからかうと、メーテは真っ赤になって、周囲の物を投げてレシオンとメディンを追い出した。

「やれやれ、姉さんってばぁー、ここで正直に認めちゃえば良いのにねえ、レシオン？」

とぼけた表情でメディンが言うと

「姫様のおかげで、しばらく実戦してなくても反射神経は衰えませんよ」

姫が投げたものを器用に回避したレシオンが苦笑いと言うと

「そう言いつつ、訓練はサボってないのにね、レシオン。相変わらずの腕前だって聞いているよ。姉さん付じゃなくて、もっと腕を活かせるポジションに異動させてあげようか？もちろん、コレは上がると思うよ」

手でコインの形を作り、ひらひらさせて、メディンが言うと

「いえ、せつかくですが、私は満足してるんですよ。もちろん、どんな盗賊や誘拐などが現れてもお守りするつもりですから、訓練は欠かせませんよ」

嬉しそうに告げるレシオンを見て

「ちえっ、両想いなんて、俺っちつまんないの。姉さんが片恋する姿なんて見てみたいのにな」

いじけるようにメディンが呟いた。

対してレシオンはにっこりと微笑み「失礼します、メディン殿下」と美しい敬礼をし、軽やかな足取りで去った。

メディンは「ちえっ、姉さんと違って全く食えないや」と拗ねていた。

その夜、メーテは嫌な夢を見ていた。

楽勝と言われる反乱軍に苦戦する王国軍……。

目に捕えられぬほどの速度で、空から墜落する不思議な光。光は、王国軍の兵を混乱させ、直撃した者は即死していた。光に困惑しつつも、砦は壊されていく。

反乱軍が、攻めてくる。

砦内部の作りもお見通しが如く、迫ってくる。

メディンや、それぞれの小規模の隊の隊長の懸命の指揮も虚しく、王国軍は徐々に兵を失っていく。

反乱軍の弓が弓部隊の隊長、エリンの胸を貫く。

陽動されるように、反乱軍が興奮気味に迫ってくる。

砦の中枢まで責め立てられ、王国軍は、半数以上の兵の命が落とされていく。

メディンは手に持つ剣を握り直して、敵陣に飛び込んだ。

敵陣の軍兵を刺し貫いていく。

王国軍が砦内部に追い立てられつつも、抵抗する。

しかし、その敵の軍が迫ってくる。

敵軍の弓が、メディンの体を貫く。

その弓を体に貫かせたまま、メディンは敵軍の将である男の所へ飛び込んだ。

その敵軍の剣が、よろけるメディンの首を狙う。

だ……！ダメ……………

「メディン……………！」

はっと目を覚ますと、メーテは自分の部屋の寝台で眠っていたことに気がつく。

自分の叫び声で目が覚めたらしい。

「な……なんて不吉な……………」

メーテは嫌な気分髪をかきあげた。

窓を眺める。外は暗い。

どうやら、まだ深夜のようだった。

ふと母の形見である赤いリングが僅かに輝いていることに気がついた。

「光ってる・・・？まさか・・・そんなわけないわね・・・」
月の光でも反射したのだろうと、赤いリングを撫でると光はもう消えていた。

メデインを産んですぐに亡くなった母の一族はドカランの出身ではなく、遠い北の異民族だったという。

肌が黒色で、髪が青または金の民族。

彼らは、少数民族であるが、予知夢を見る力や、周囲の空模様を変えるような奇術も扱えたというらしい。

彼らの生活は貧しく、北の辺境で食べ物さえもなく、枯れた大地に追い込まれ、ひっそりと暮らしていたと言う。

ジーバ国の領土にほど近い場所であったため、ジーバ国の軍に怯え、北の辺境のヨード岬近くの森に、息を潜めるように暮らしていたらしい。

母はそこで育っていて、この赤いリングはその時の一族の長から幼き頃貰ったと言う。

母は小さな頃、その一族でもまれなほどの予知夢を見ることが出来たことから、次期長になるという心づもりを持ってと言われて、いろいろ訓練させられたと言う。

たまたま、そのころ、まだ王子として育っていた父は、ジーバ国の状況を視察にその付近に居た。怪しい妖術を使うと言われる変な一族が居るから、森の方に近づくのは危険だから行ってはいけなとジーバ国王に助言された父は、喜んでその森に散歩に出たと言う。当時から剣の腕は世界でも類を見ないと称われた父には、腰に使い慣れた剣があれば何の恐怖もなかったと言う。

そこでたまたま一人で森の池の所で予知力を鍛えるために静かに瞳を閉じて座っていた母を見かけたと言う。

金色の美しい髪と黒い肌、そして純粋な赤い瞳。

見かけて声をかけ、二人は恋に落ちたのだと父は照れながら語ってくれた。

しかし、母はその時から、修行に身が入らなくなり、予知夢を見

ることも出来ず、一族から冷たくあしらわれるようになり、冷たい仕打ちに疲れた母はジーバ国に逃げてきて、長期滞在で遊び呆けてた父はまたそれを見かけ、母を連れ帰ったという。

『それってどうなの？』って話を聞いた時思っただけだね……。当然ながら、その子を連れ帰ったら、反対の上、追い出せと言われたらしいし、国民の理解も得られるわけがないと言われたから、子供を作っちゃったと……。さらにどうなのって話だったらしいけどね。

私と弟を、一歳しか変わらずに産み落として母は亡くなった。

妃と言う立場は貰えなかったけれど、私は幸せでした、と言い残して死んだと言う。

その後の両親の死後、国王となった父は、死んだ母の祭壇を祀り、王妃としての地位を与えたと言う。

そんなわけで父はいつも、異民族を連れてこようが、部下を連れてこようが、妖精や妖怪を連れてこようが構わんからな、と私と弟にどんな相手でも恋人として認める約束をしていた。

いくらなんでも妖精や妖怪は居ないだろう、とメーテは引き攣っていたが。

居たとしても、嫌だし、と。

なので王国を継ぐ弟の恋人がリディナであつてもいいらしい。

今の情勢であれば、国を継ぐメディンの相手は隣国ジーバとの友好を深めるために、ジーバの王女と婚約させると言うのが一番妥当な情勢ではあるのだけれど。

それにしても、今の夢……。すごく不吉……。あれではメディンは……。

指にはめているリングをそつと撫でて、目をギュツと閉じる。

予知夢なんてこと……。有るわけない……。私は今までそんなものの……。見たことないし……。

不安に苛まれながらも、何とか寝付いた。

*

翌日、メーテは父ドマに掛け合った。

弟、メディンの出兵についてだった。

「メディンにもしものことが有ったらどうする気よ？」

もちろん、夢の内容など不吉過ぎて口には出せなかった。

父ドマは、しかし、それだけの大軍を維持するには、王家の血をひくものが出るしかないと言う。

そのために、兵は1万という大軍で大事なく終わらせるつもりだと言う。

皆もかなりの強化をし、不足であれば援軍を送ることも可能な状態で送ると言う。

けれど、メーテは昨夜の夢もしくり、嫌な予感がしてならなかった。

これが母の遺伝の予知夢だなんて認めることはできないし、口にも出せない。しかし、弟の出兵だけはやめて欲しいと懇願した。

だが、結局その願いは果たされることなく、ついに弟の率いる軍は、北東のドーバーへと出立した。

弟の顔を見るとよくわからない想いが込み上げて来たから、出発の日の朝の城の廊下で「見送りなんて絶対しないから！でも絶対あんたは無事に帰ってきなさいよ！」と怒鳴りつけておいた。

弟はけらけら笑いながら「ねーさんもそんなヒステリックばかりで、レシオンに振られないようにねえ」と言っていた。私は舌を出しておもいきり持っていたカップを投げた。

相変わらず器用に避けられたけど。

私とメディンは年が近かったからいつも一緒に姉弟だった。

リディナと3人でよく遊んだ。

私は一番年上だったから、気がつけば鼻垂れた弟をお世話していたことを思い出す。

そして首を振った。

昔のことを回想するなんて、なおさら縁起悪いわ・・・本当に死んでしまいたいじゃない！

そう思うと大人しく自室に戻った。

ドーバーに向けて出立した弟の軍の情報は、連絡係を頻繁に送り合って順調に進んでいるとかと聞くことが出来た。

出立したその夜も用件がないのに連絡係が来たほどだった。

大丈夫・・・・・・・・・・。

メーテはそう言い聞かせて、眠りについた。

2章 反乱軍の猛攻

弟がドーバーに向かい、半月が過ぎた頃のことだった。

弟の軍は、反乱軍と激突し、最初は善戦していると連絡を受けていたが、そのうち状況は暗転してきていたので、追加で援軍を送って数日が経った頃だった。

「ドマ陛下！大変です！」

ドマの配下であるゼニオンが、殺気立った顔で、ぐったりと疲れ切り、傷だらけの兵士、ケボンとローダンを引き摺るように連れて現れる。

メディンの側近バフガスの指揮で動いていた兵ケボンとローダンが傷だらけで帰還した。

二人は戦いの最中、連絡係としてメディンの命令により放されてきたのだと言う。

たまたま父とチェス遊びに興じていたメーテも、その急な連絡を耳にすることになった。

国王に対し、ちゃんとした手順を取らず、直々に話したいことがあると言う。余程の連絡には違いはなかった。

「王国軍は、反乱軍に敗れました！メディン様は、自ら弓矢に打ち

抜かれながらも奮闘し、敵将の一人を自らの首と引き換えに打ち倒しました！すでに私は馬で逃げ走ってきた後のことです。このいつも監視に使っていた双眼鏡で小さなお姿を拝見していただけてすが……遠目からにも立派な勇士でした」

二人は皆の監視役や連絡係を主な仕事としていた。

戦いのためと言うより、見張り係のような役割を与えられて皆に向かつていた。

「な……なにを言ってるの……」

「そ、そんな……メディンが死んだ……って言うの？！そんなわけないじゃない！なんかの間違いに決まってるわ。そんなのウソ以外ないわ！あなた、ちょっと、嘘なんて言わないでよ！そんな縁起が悪い」

メーテは何を言われているのかわからなかった。

興奮するメーテから、目を離し、ドマは部下の報告に耳を傾けた。メーテは報告内容を詳しく聞くと、半月前に見た夢のような情景が浮かび上がってきた。

反乱軍に押され、軍を失い、将が倒され、弟が弓に打たれたあの情景が……

それとほぼ同じような情景で、皆は陥落し、付近の街ごと焼け放たれ、ほぼ全滅の状態だという。

壊滅した後は自分は混乱の中、逃げ伸びてきたので、その後生存者がどれだけ残るかは定かではないと言う。

完全に鎮圧された後なら、逃げ伸びる隙もなくなるというメディンの指示によつて、なんとか逃れてきたという。

話を聞いているうちメーテは目が回り、倒れそうになった。

「あ……」

はっと倒れそうな自分に気がついて、意識を保った。

「さらに陛下！やはり皆の情報を漏らした内通者が居るかも知れないという話です……そ、そして陛下……今回の戦いが始めってから、バフガス様の姿を皆内で見ていないのです」

「・・・何だと・・・」

「バフガス様はメディン様に付き添って護衛していました。ですが、今回のこの戦において、バフガス様は反乱軍が現れた時刻ごろに、ふと消息が途絶えてしまったのです」

「バフガス・・・・・・が」

「そして、敵軍は怪しげな雷を落とす術でこちらの動きを陽動し、困惑させたのです。その術は周囲に雷を落として、光によって周りの視界は失せ、こちらは動きを止まられている間に遠方から弓が飛んできて・・・・・・」

ドマは静かに目を瞑った。

バフガスは、元々、死んだ妃リオと共に、こっそりと一族を出てきた男。

あの頃はまだ若かったバフガスを信じて、鍛えさせた事を覚えている。

そして今回、奇術使いという話が上がっている。

では首謀者は・・・・・・。

しかし、あの一族は、3千4千なんて大軍にはならないはず。

とすると、奇術を使えるものが首謀し、残りは雑兵と言うことか。兵の指揮力や総統力は低そうだが、内部情報筒抜けであり、砦の意味がなかったとしても、メディンたちの部隊が潰れるということとは、他にも秘密が有るかもしれない。

ドマが考えを巡らせていると、ゼニオンが声を掛けた。

「陛下？どうなされました？」

「いや、他に何か気がついたことは？」

ケボンとローダンに言うのと、二人は顔を見合わせ

「そう言えば、もうひとつ。反乱軍は、正常な意識ではない、という事を伝え聞いています」

ローダンが告げる。

「正常ではない？」

ドマが問うと

「どうも意識が錯乱状態で、自らの身を構わず飛び込んでくるようだ……まるで麻薬患者のように、剣を振りまわして突っ込んでくるらしい、と」

ドマはそれについて、ローダンに詳しく話を聞いた。薬物やまたは妖術などで、興奮状態にさせて兵士の士気を上げているようだ。

ただの拾い集めた雑兵で有れば、内部情報が漏れようと、メインの隊を破ることは出来ないはずだ。

妖術の陽動と、兵たちの精神を壊すことで、メインの兵を破ったということか。

まさに捨て身がかりということか。

つまり、雑兵たちはおるか、あの一族も全て捨て身での戦いと言うことなのかもしれない。この戦いの後、自らの顛末は考えておらず、ただ、ドカラン王国を……いや、私を怨んでのことなのかも知れない。

ドマは、その詳細を聞くと、ケボンとローダンには、ゆっくり休むよう命じ、退却させ、ふらふらとするメーテに目を向け、自らの出陣の覚悟を決めたドマはレシオンに命を下す。

「レシオン！」

と大きく叫んだ。

レシオンは、控えていた影から現れた。

「はい、陛下」

レシオンはドマに膝まづいた。

「今度は私がこの城とその付近を砦とし、王国の全てを掛けて私が戦いに挑む。レシオンは、メーテを連れて、隣国のジーバに向かって欲しい。陸上ではなく、海路を使って、反乱軍の進軍ルートから外れて向かって欲しい……メーテを頼む。もしもの時は……メーテとこの国の民を……頼む。兵は4千付けておく。恐らくそれ以上は……海路を渡るのに不便になるだろう。船は巨大船と中型船、小型船、合わせて300を手配しておく」

「命に代えましても、お守りいたします」

レシオンも覚悟を決めた表情でドマに応じた。

「あと、ゼニオン！お前は城下町の街人に避難を呼びかける。それから、この城、および付近の城塞や城壁を全て造り変えさせる。今のままでは危険だ」

ドマの部下の一人であるゼニオンも、瞬時に行動し、ドマに一礼すると足早に行動を開始した。

「リーバー！さっそく、作成会議だ」

リーバーは颯爽とドマの前に現れ、その横に付く。

「リーバー、今のままではバスガスから情報が筒抜けになる。エルの協力を以って、城や砦の改装工事を行うようにも銘じておいてくれ」

リーバーは「御意」とうなづく。

メーテはぼーっとやり取りがまるで現実ではないものと思えず、目をぱちぱちさせて見ていた。

「それでは、私も軍の準備を早々にする。レシオンは海路の手配とジーバの連絡は行っておくから、メーテを連れて今夜中にドカランを発ってほしい」

父の命令にはっ、と気が付いたメーテが反論する。

「ちょ……よくわからないけど待つてよ！メディンが死んだなんて嘘よ！私は城を離れたりしないわ！お父様と離れたりしないわ！だってお父様は世界一の武将よ！敗れるはずがない！だからお父様のお側が一番安全でしょ！」

メーテは父にしがみついて首を振る。

レシオンは、メーテの体を抑え、ドマから引き離す。

興奮して暴れる姫君の鳩尾を殴った。

「なっ……レシオン……ぐ……ゆるさな……」

メーテの意識を失う寸前、レシオンは、白い錠剤を取り出して、無理やり飲ませた。

「ご無礼をお許しください、姫。これでしばらくは目が覚めません。

気がついたときはジーバに向かう船の中です」

そういうレシオンの言葉を聞き、崩れるように姫君は意識を失った。

意識を失った姫の体を支えて、抱きかかえる。

兵4千を抱え、メーテ姫の一団は、深夜の闇に包まれながらも、馬でガンダ岬まで向かった。

*

姫は眠ったまま、大人しくレシオンに抱きかかえられていた。

姫の一団が港に着き、無事に乗船し、姫を海路で連れて行けそうだと、ドカラン王に報告の遣いをやると、レシオンは姫を一番良い船室のベットに横たえて、自分も出航の準備を始めた。

戦闘船などを積み込み、積み込まない艦体を子部隊ごとにチームを組ませて、分けて乗船させ、何百体もの船体とともに、大きな船を中心に、全ての船が出発が出来たのは、もう夕刻になっていた。

反乱軍やその他海賊などと争いになる可能性もあると、ドマ様は大量な戦艦を用意していた。

行き交わせている情報によると、反乱軍はまっすぐ、ドカラン城の方に向かつており、進軍していると言う。

しかし、バフガスがスパイとなれば厄介だと思った。

バフガスはレシオンがまだ幼少のころ、城に仕えていた父に連れられ、この城に来ていたとき、レシオンは初めて会った。

レシオンがまだ、5歳。バフガスは16歳くらいの少年だった。

亡くなられたリオ王妃様がまだ、ご存命で・・・当時、王妃とは言われていなかったけれど、生まれたばかりの小さな姫、メーテを抱えていたのをレシオンは覚えていた。

リオ様の側を離れず、バフガスは王に仕えると言うより、王妃様の護身が天命のような顔をしていた。

国王ドマ様・・・当時はまだ国王ではなく、王子と呼ばれていたが・・・に、バフガスは直々に剣を教わっていたようだった。

けして、俺にはしてもらえない行為・・・なぜあの王妃様に付いて現れた、良く分からない異邦者がそんなことをしてもらえるのか、俺はあの時、嫉妬に近い感情を持っていた。

ドマ様はおそらく、リオ様の身边が心配だったのである。

後で知ったが、当時、リオ様は色々な配下のやつかみや、ドマ様のご両親・・・当時国王様や王妃様からも圧力を受けて、毒物などを盛られることや、短剣で切りつけられることや、その他いろいろな命を狙われるような局面があったと言う。

しかし、王子と言う自らの身分こそが邪魔をし、リオ様を直接守ることが出来なかったドマは、その護身をバフガスに頼んだ。

身重になったリオ様も、バフガスは命がけでどんな時も守っていた男。

そしてドマ様から剣術を教わった男。世界一と歌われたドマ様直々に剣術を習った幸運な男とレシオンはずっとバフガスに妬いていた。

リオ様がメディン殿下を出産後、亡くなられた後は、メディン様の配下とされた男。

その後、レシオンは16になることには、9歳だったメーテ様の護身を任されて城に正式に上がることになった時には、気が付いていた。

バフガスという男が心の底で守りたかったのはドマ様ではなく、メディン殿下でもなく、リオ様だけだったんだろうと。

俺はと言うと・・・我儘し放題、物投げ放題、気に入らなければすぐに癪癪を起こす、いかにもお姫様育ちの我儘お嬢様姫に振り回されているうち、お姫様の物ぶつけ攻撃の回避法とか考えているうち、バフガスのことは頭から消えていたけれど。

けれども、訓練場や作業場でバフガスを目にしたことは有る。そして、会話したこともある。

「俺にはもう、大切なものなんて何一つない。ただ、メディン殿下を今守っているのは殿下の中にリオがいると思ったからだ……」

「……けど……」

「……けどリオを……」

「……」

リ才様の命を奪ったのは、メディン殿下のせいと言いたかったのか。

それとも、本来、出産すれば尽きる命と知っていて、孕ませたドマ様のせいだとも言いたかつたのか、単純に、リオ様の心を奪つたのはドマ様だと言いたかつたのか、レシオンはわからなかつた。

ただ、そこにあつたのは明確な恨み、そして、深い苦悩だつたように思えた。

愛する人の忘れ形見で有り、そして、憎らしい恋敵の子というわけか。

バフガスが反乱軍に付くとすれば、理由は恐らく、その辺で有ると……ドマ様も気がついては居たのだろうとレシオンは思った。

しかし、俺の身分で、ドマ様に向けて、口に出せるような事ではなかった。

それに、ドマ様もバフガスの想いには気が付いて居たはずだ。それでも、メディン殿下の側近として信用して配置したのは、ドマ様もバフガスを信じれるものがあつたからであるだろうし。

……確かにリオ様は、レシオンの幼い時の記憶でも美しい女性ではあった。

ふと窓を見た。

船はまっすぐ順調にジーバへ向かっているようだ。

幸い、波も穏やかだった。

出航を終え、順調に進む船。

船員たちもそれぞれ持ち場についてゆつくりとおしゃべりなどに興じていた。レシオンは、船室に戻り、我儘姫の様子を見に行った。

姫はすうすうと息をたてて眠っていた。

睡眠薬が切れれば、暴れ狂うに違いない姫君は大人しく眠っているだけだった。

代々、ドカラン国王に仕えてきたレシオンの一家は、経済的には恵まれていた。

国王に直接仕えることが許される身分を与えられて来たので、他の身分の者を見かけると哀れに思ったこともあった。

その分、生死はわからない危険な立場ではあったが、満足していた。

他にも武術が優れた者はそれなりには居たのだ。

今でこそ、誰にも追従を許さないほどの腕はあると思うのだが、16だった当時がそうだったかと誇れないと思える。

自分を姫に付けたのは、代々の一家の信頼があつてこそだったのだろうとも思った。

しかし、それだけで考えるなら、まだ候補になる人間は居たはずだった。

後に直接、ドマ様に何故自分を姫の護衛に選んだのか、さりげなく聞くと『なあに、我儘姫のお守なんて、良い年越えるとやりたくないという気にもなってくるだろう？まだ若くて有望だったレシオンは的確だったのだよ。姫の立場から言えば、恐らく戦争に向かわせることはない。メディンは武将として育てるが、メーテを武将として育てる気はないので、子守になってしまっからな。萎えてしまいうような武将は外したのだよ。もちろん、レシオン。お前自信が気に染まぬならいつでも訴え出るがいい。私は聞こう。レシオンの腕に叶う場所に置いてくれと訴え出るのであれば、私もそうするのだ。レシオン、お前は どうしたい？』と反対に問いにされて、少しの間、レシオンは悩んだ。姫の子守ではなく、自らの腕が生かせる場所に行くべきかを。兵士を志願して来たからには、死の覚悟は有った。しかし、常に危険が伴うが手腕を活かせる兵士として戦うのが良いのか、安全な姫を守るのが良いのかと問われ、あの頃は即答できない

かつたのを覚えていた。

しかし、もうこの薄情な姫は覚えていないだろうが、姫を守る位置から、武將を志願し、異動を申し入れようと決めた日の早朝、まだ寝ぼけるレシオンを呼び出して、我儘姫はこう言った。

『今日ね、レシオンがね、わたしのそば、嫌だっていう夢を見たのでもね、メーテ、レシオンはずっと遊び相手で居て欲しいの』

小さな姫は、レシオンの手を握って、大きな目をレシオンに向けてこう言った。

『メーテの側から居なくなったら、嫌だよ？ずっとレシオンはメーテを守ってね。これあげるから』

そう言つと、寝不足だった姫はそのままレシオンに抱きついたまま、眠ってしまった。

姫の小さな手に握られていて、渡された物。小さなチョーカーだった。姫がお気に入りだと言つて付けていたサメの歯を象った飾りが付いたチョーカー。

そう言われることで、異動の話をドマ様に伝えることが永遠に来なくなつた。

「懐かしいな……」

ぼそつと呟いた。

異動する意思を崩させた元凶の姫君は、あの頃と変わらない安らかな表情で寝入っていた。薬は良く効いているようだ。

いつの間にか、自分にとって、この我儘姫を守ることこそが全てになつていたことに気がついて、バフガスの気持ちかわからないわけではないと思へはした。

自分は単なる従者であり、この大国の王女として生まれた姫はいつか、他国の王子や隣近の受領などの婚儀が決まることになるば、自分はそれを見送ることが精一杯の権利であるのだから。

姫が誰を想うことになつても、それを阻害することなど許されない。

他国に嫁ぐとかになるとすれば、もうその後、再会することはな

いだろう。

その後、その相手との子を守る役目を与えられたとすると、苦悩を感じるのかも知れない。もちろん、裏切る事はないと思うが・
・・・・それ以前に、他国の王に仕えることなどないと思うし、俺はもし、この姫が他国に嫁ぐとすれば、見送るだけであるとは思われるけれど。

見送るまでも・・・・それでも・・・・。

「それまでも・・・・お仕えますよ・・・・」

この身に代えても、お守りします。

レシオンは、あれ以来ずっと離さず首に付けていたチョーカーを、そつと握りしめた。

*

「ん・・・・・？」

メーテは目を覚ますと、そこは、・・・天井が木の板で出来ている天井が見えた。

「・・・ここは・・・何処？」

ぼんやりと起きると、眩暈がした。

きよろきよろすると、窓からは、海が見えた。

窓の外の景色が動いている。

「・・・？」

「お目覚めですか？ちょうど良かったです！今、お粥をお持ちしたんです」

メーテの世話係として船にも乗船してきたリディナが、明るい顔で、お粥を持ち、メーテの眠る部屋に入ってきた。

「お粥・・・・？私、嫌いよ・・・・」

そう言いつつも、自分がものすごい空腹であることに気が付いた。
「何かすごいおなか減ってるみたい・・・もつとこつてりとした・・・美味しいフライドチンとか持ってきてよ。あとミルクじやなくて、ハーブティがいいわ」

ぼんやりとメーテが言うとりディナが首を振った。

「まずは、これをお召し上がりください・・・ゆつくりですよ。あの、眠っていた今まで、栄養剤とかは補給させて来ていましたけど、本当にしばらく食事は取られていないので、いきなりチキンを食べたりすると、胃に負担になります・・・ミルクは胃を守る効果があるんです」

リディナがおかゆのお碗の蓋を開けて、メーテに差し出す。

メーテは目を擦りながら体を起して、リディナが差し出したスプーンを手に持った。

「あ・・・私、ずっと眠っていたの・・・？そ、そうよ、レシオン！殴って睡眠薬飲ませるなんて・・・許さないわ」

そうだ、此処は船の中で、動いているんだ。

私を殴って睡眠薬を飲ませて船に・・・。

怒りに燃える姫君だが、拳を握るとやはり眩暈がした。

「あ・・・」

怒りにまかせて立ち上がりとしたが、起き上がれない。

「ダメですよ、急には。2日間眠って居たみたいですから」

「2日・・・」

反乱軍が迫ってきていると連絡され、父様は私を城から離れた・・・。

あれから・・・2日・・・。

「リディナ、父様は・・・？」

問うとりディナは「詳しい情報はあまり船なので取れていないみたいですが・・・反乱軍の対策に追われているようです」とリディナは言った。

「そう・・・」

私は・・・・・・・・私は側に居ても父様と一緒に戦えるわけじゃない・・・・・・・・。

足手まといにならないように・・・逃げているのが一番いいのよね・・・・・・・・。

メーテは、やりきれない思いで、リディナが持ってきたホットミルクと、お粥を飲み込んだ。

メーテが食べ終わった頃、「失礼します」とすました顔でレシオンが部屋に入ってきた。

「あ・・・・・・・・レシオン様・・・・・・・・」

リディナが食器を片づけて退出しようとした時、メーテは「食器は置いておいて！」と言って、リディナに退出させた。

「よくも殴って薬を盛ってくれたわよね」

怒りに声が震えてきた。

カップと皿は怒りを込めてレシオンにぶつけようかと思い、そのつもりで置いておいてとリディナに言ったんだけど・・・・・・・・出来なかった。

レシオンが食器が飛ぶことを予測したにも関わらず、俯いたままの姫を見て「メーテ様？」と言って首を傾げた。

投げる出来なかったのは、ふらついたからではなかった。リディナの食事を食べたら体調は戻ってきた。栄養剤は確かに使われているのだろう。体力が落ちてなかった。

「・・・・・・・・いえ・・・・・・・・誰のせいにしても仕方ないわ・・・・・・・・私が無力だから・・・・・・・・父様は私を逃がそうとしただけだもの・・・・・・・・」

メーテは、手が震え、涙が落ちてきた。

「・・・・・・・・私は・・・・・・・・戦えるわけじゃない・・・・・・・・でも・・・・・・・・なんで私には夢ばかりみせるの？」

メーテは涙が止まらなかった。

レシオンは側に寄った。

メーテは、ベットから降りると、ふらつく足でレシオンに駆け寄

った。

「何か嫌な夢でも．．．．？」

レシオンが問うと、メーテは素直に頷いた。

「反乱軍が．．．．私を追ってくる．．．．今度はレシオンが．．．．危険に晒される夢を．．．．」

それ以上はもう、言えなかった。

レシオンに抱きついて、メーテは言った。

「お願い．．．．死なないで．．．．」

「メーテ様．．．．」

メーテは、夢の中で反乱軍に追われ、レシオンが反乱軍の足止めをするために、反乱軍に向かっていく姿を見ていた。

夢の中で私は叫んでいた。

レシオンを．．．．レシオンを止めるために。

「父様も無事かどうか分からない。私は、もうこれ以上、大事な人を失いたくない」

レシオンにメーテはぎゅっと抱きついた。

「メーテ様．．．．？」

レシオンは困惑した。

「レシオン．．．．ずっと．．．．そのペンダントを渡した時から．．．．いいえ、その前から．．．．ずっと好きよ」

だから、だから、死なないで．．．．行かないで。

レシオンの胸に顔を寄せ、メーテは目を閉じた。

レシオンは、そんなメーテを優しく抱きしめた。

反乱軍が王国近くまで迫ってきた。

ドマは城や近くの砦、城塞やその他、全てに至急の改装を入れた。日数が少なく、荒削りにはなったが、バフガスが抑えている、城塞、砦の造りとは全く変えることが出来た。

トラップの位置や、仕掛けなども全て改装を入れ、戦術に関して、今までの策略とは違う動きでリーバーと連携を考えていた。

反乱軍が如何に死に物狂いでかかってこようと、メディンとの戦いで向こうも千以上の兵を失っており、こちらは6〜7倍の兵が居る。それに対しては如何様にもなるであろう。ただ問題は奇術についてだ。

反乱軍の進軍から考えれば後、4日間ほどで、奇術の対策を練らなければならぬ。

何か手段はないだろうか。

ドマが自室で考えを巡らせうろつくと歩いて居ると、ふと、紅い光に包まれた女性が正面に居た。

バフガスは目を擦った。

瞬きしても、女性が見える。

その女性の姿は、死んだときのままのリオに見える。

「疲れて……いるのか……」

目を瞑って首を振る。

すると

ドマ……

声ではない声が確かに聞こえた。

「ま……まさか……」

ドマは首を振った。

時間がないわ、私はそう長くは会話は出来ない……伝えた
いことがあるの

ドマは押し黙った。

「本当に……リオ……なのか？」

女性は頷いた。

父は今回の件は騙されているの。でも・・・気が付かず本気だわ。父の奇術は確かに強いわ。メーテであれば、私のリングの力で止められるかも知れない・・・でもメーテは今までそんなことしたことがないから、出来るかどうかはわからない。私がこの国に着た時に身につけていた、マントがまだあるかしら？あれをあなたに身につけて欲しいの

「マント・・・・・・・・？」

もう処分してしまったかしら？あのマントには、術士である、無にかかわらず、妖術がある程度、吸収してくれる力が有るのそれを聞くとドマは大切にしまってあった服入れの一番奥からボロボロになっている赤いマントを取り出した。ところどころに金の刺繍がされているが、禿げていた。

しかし、きれいに洗われており、汚れはなかった。

大切に保管してくれていたのね・・・私が身につけていた時のままだわ・・・いえ、その時より洗濯されていてきれいになっているかしら・・・ボロボロだけれど、父の術の対策にはなると思うの

「リオ・・・・・・・・やはり今回の反乱は・・・・・・・・」

ええ、私の父よ・・・何度も止めてと夢で呼びかけようと頑張っているの。同じ術が使える者であればある程度コンタクトが取れそうなのだけれど・・・遮断しているのね。余程思い込んでいるみたいで、私が全然夢に入れないの・・・この戦いは私がもつとも望んでいないもの・・・

「そう・・・か」

ドマは頷くと、自らのマントを外し、そのマントを身に付けた。絶対に外さないで・・・私もこの残留している魂をかけて、奇術を防ぐから・・・あまり長くは居れないわ・・・それじゃ・・・そろそろ限界みたい・・・

「リオ、待て。まず、無理はしないで欲しい。きっと鎮圧し・・・

・そして平和を戻し、あなたの父を止める。だから、無理はしないでいい。だが、一つだけ聞きたい。メディンのことだ……メディンは……やはりメディンは……」

ドマは秘かに、ドーバーにも人を遣って、後の状況を確認させていた。

ドーバーは皆は焼けただれ、巨大な廃墟と化し、大量な兵の死体が転がり、明かりもなく、焼け焦げた臭いと腐敗した死体の臭いで埋め尽くされていたという。

すでに生存者の姿はなく、反乱軍の姿も無く、もし生き残った兵士がいるとすれば、付近の村に逃げているのだと思いい、付近の村も調べさせた所、数名の兵士が逃げ伸びて居たと言う情報が有った。しかし、メディンは逃げ伸びておらず、兵たちと再び探すと、後に崩れたと思われる焼けただれた砦の壁の破片の下から、メディンらしき遺体を見つけたと言う。

ドマは俯いて、続けた。

「メーテがあれだけ止めていたのに、聞くことが出来なかった。メーテの言うことに耳を傾けていれば、メディンは死ななかったかもしれない。リオは死ぬ前に、『私と同じ力をメーテの中に感じる』と言っていたよな。もしかするとメーテがメディンの出軍を止めたのは予知力が働いたのではないかと思うと、やりきれない思いがしている……メディンを……メディンを私が殺してしまったのかと……」

言葉に詰まって俯くドマにリオは手を伸ばした。

けして触れることのない、魂の光だが、ドマも感じる事が出来た。

「……私はずっと、ゆっくり眠っていたわ。天の世界って、ぼんやりとした場所で……誰もがよく眠っているわ。特別、何か恨みや悲しみなどを残してきた者は、たまに目が覚めて、地上に魂だけ戻ってしまうことも有るらしいけども、みな殆どの者は良く寝ているわ。けれど、私にふと触れた者がいたの。父さんと姉さんを

守って！と魂で叫んで……そして私が振り返ると、姿が消えた。それ以来、私は不思議なことに、こうして短い間なら、地上が見えるようになったの……。最後の魂の力の呼びかけ……。少年のような声。私が知らない声なのに知っているような声。私は聞こえた……。私はその天の世界で自らの存在を消失させるくらいの魂の絶叫をした声に答えなければならない……。それを聞くと、ドマは顔を隠して、大粒の涙で泣いていた。女性の姿は、かき消えた。

ドマは、マントを頭がすっぽり隠せる程度のサイズに切り取った。すると、6つくらいに切り取れた。

中核になる砦の部隊の隊長に、奇術が来た際に備え、頭に被るヘルメットに入れこませる。リオがあそこまで言うのだ。奇術を吸う力は有る筈だ。

後は、奇術に対して、慌てず回避させるということか。

「リオ……。必ず、メディンの仇を取る。そしてあなたの父上を必ず、説得しよう……。そして、メディン……。お前の死は無駄にはしない！」

ドマは自らの大剣を構え、各部隊の奇術の対策の指示に入った。

*

それから4日後の早朝、反乱軍がドカラン国の城付近の砦に総攻撃をかけてきた。

ドマは砦、そして、城付近に兵とそして、奇術対策のために、光を避けること、そして各部隊の隊長にマントの切れ端を渡し、防ぐように命じた。

城付近の砦は6つ。隣接し、それぞれの砦が、肉眼でも小さく見える位置にあった。

人数が少ない反乱軍が攻めてくると思われるのは、正面からしかないが、そこへは全ての6つの砦から見通せる位置にあるため、遠くからであれば、弓で打ち抜き、近くに迫った場合には、下に肉弾戦の兵たちを構えさせていた。

砦より城側への侵入を防ぐためには、それぞれ攻撃を受けるであろう場所を徹底的に守る必要があった。

最初は始めて見る奇術に戸惑ったものの、兵の数も圧倒的に違いがあり、城や砦の改装も出来ていたため、敵軍は、簡単に砦内のトラップにかかってきた。

また、マントの切れ端は奇術の力を吸収して、落雷の攻撃は無効化された。

光が落ちても被害はなかった。

しかも、そのマントは思っていた効果以上で、持っているものの、数メートル先までの術を無効化しているようだった。

圧倒的な兵力の違い、砦の改装の効果、マントの効果は効果的だったようだ。

反乱軍は動揺し、次第に兵を引いていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・リオ・・・・・・・・」

6つの砦を守らすために部隊の長たちに全て渡してしまったが、6つのマントは、マントだけの力ではなく、リオが残存する魂を込めて、この辺り全体を守ってくれていると思えた。マントは本来付けている人の身を守るもの。数メートルの効果などあるとは思いたいからだ。

リオは言っていた。

リオの魂に、呼びかけてきたのは・・・・・・・・メディンだったと天の世界ですら、居場所を失うほどの残る魂の力を振り絞って上げた声。

それが天の世界で眠っていたリオを起こした、と。

この戦で勝っても・・・・・・・・メディンは戻らない。

死んだ者は戻らない。

あの時、メディンを出さなければ、私はメディンを失わなかった。戦いの情勢は決まった。

反乱軍はすでに半数以上は、兵を失っている。三千くらいの兵だ。それも本来、戦には慣れない雑兵たち。奇術が無効化され、こちらの戦略が漏れなければ、負けるはずがない戦いではあった。

ドマは、兵隊たちに命じ、反乱軍を一掃するよう命じた。反乱軍たちはのらくらと逃げていく。

追撃して、反乱軍たちを倒し、捕えていく。しかし、奇術を使っていたはずの陣営が姿を見せない。

兵隊たちもあと千くらいは居るはずだが、奇術使いたちと共に逃げられたのか。

ドマ自らも砦に移動して、反乱軍たちを囲った。

夕刻には、生き残った反乱軍たちを捕えた。

次の日の朝には、ついに、この反乱軍との攻防は終わりを見せた。しかし、首謀者の姿が見えない。

反乱軍の一人を捕まえ、首謀者たちの行き先を問う。

その者はたくさん捕えた兵の中で、ほぼ唯一に近い、正気だった。他の者は、何を言っても、けらけらを笑ったり、剣を振り回したり、倒れたりするだけだった。

正気だった者は、首謀者に直接仕えていたわけではなく、お金でちよつとの間と雇われたらしき雑兵で刀を突き付けると、すぐに吐いた。

思いもよらぬ言葉を乗せて。

「……………術者たちは……………術が無効化された時に、後退していった。兵たちも俺たちみたいに捨て兵と、自分たちと一緒に逃げる兵とで分けてたんだ。今はガンダ岬付近だよ、多分……………船で逃げたって言う、あんたの娘だかを追ってると思う」「なんだと？」

ドマはもう一度その兵に問う。

「何故、娘が関係あるのか？今まで兵に出させた事も無い。娘には恨みを持つものなど居ないはずだ！」

ドマは真っ青になりながら問う。

「知らないよ……そんなこと。吐いたんだから、自由にしてよ。俺は他の奴らと違って、薬入りの精力剤だかを飲むふりして飲まなかったから、廃人になることは避けれたし、俺は関係ねえよ、もうお金貰ったけど、もう、あんな奇術使いも離れたし、関係ねえし！後のことはマジ知らねえ」

道にペツと唾を吐いて、兵はドマを見た。

ドマは一旦、気持ちを落ちつけてこう言った。

「自由に出来るかは、これから決める。それまでは地下牢に入って貰う」

ドマは部下に指示を出し、唯一と言える正気の男を連れていくように命じた。

「けっ、吐いたのにその扱いだよ。ちなみにあの奇術使いたち、船も奇術使って速く走れるかもしれないぜ。薄気味悪かったけどさ。

俺、すげえ大金くれたから、乗っちゃっただけなんだよ。今回の戦い終わったらす、後は一生酒飲んで暮らすんだから、さっさと自由にしろよ」

文句を言って暴れる男を、部下たちに抑えさせ地下牢に入れさせ、ドマはすぐに、ガンダ岬の方へ兵を送らせた。メーテが危険に晒されると言うことを、考えていなかった。

本当にメーテが懇願した通り、城に居させた方が安全だったのか！手ががくがく震えてきた。

リオ……メディン……！頼む……メーテを守ってくれ！レシオン！

反乱軍がメーテを追っていると言う情報を、何とか無線で届けることが出来た。

そして、すぐに、ガンダ岬に兵を向かわせ、船で急いで援軍を送ったが、反乱軍の残り千くらいであろう兵と、奇術使いたちを乗せ

た船の進みはとても速く、援軍が追いつくことは難しそうだった。

しかも、何故か嵐が来て、波が荒く、小型であれば船が転覆したり、大きな船であっても、進路を取るのが非常に難しい状態だった。そんな状態にも関わらず、反乱軍の船だけはとても速く真つすぐとメーテたちの船を追っているようだった。

このままでは、メーテの乗る船に追いつかれそうであった。

メーテたちが出発したのは一週間以上も前の事だ。まだ距離は有るだろうが、反乱軍たちは船を進める術があると思えるし、他の船は舵が取れないよう嵐を起こされているようで心配になる。

城は守れた。付近の砦も落とされることなく守った。城下町も。

だが、自分の大切な子供たちを守れなくて、私は……………。

沢山の死体処理を終え、反乱軍鎮圧に沸く人々。

だが、メーテの命は危険に晒されている。

ドマは城に戻っても、落ち着いて寝ることも出来なかった。

＊

「なんだって？」

レシオンは部下からの連絡に耳を疑った。

反乱軍が、この船を追って、凄い速度で向かって来ていると言う。「ま、間違いないようです……………リーバー様からの確かな連絡だそうで、調べさせた所、反乱軍は、この船の南約300キロ地点くらいに居ると言うことです」

「300キロ？この船と300キロしか差がない、と！？」

この船は、ガンダ岬を一週間以上前に出ている。

300キロしか離れていないと言うことは、その3日後ぐらいに

は反乱軍も岬を出発したくらいの離れ方だ。しかし、ドカラン城付近の砦で戦いが起こったのは3日前の早朝。

「そんなわけないだろう!」

レシオンが部下に声を荒げる。

「はい……そう思いたいのですが……」

部下が確かにリーバーからの情報を受け取った事を詳細に語る。

「その速度なら、明日にだって追いついてしまっんじゃないのか?」

レシオンが真っ青になって部下に告げる。

部下たちは黙って、静まりかえった。

「あ……あの……」

そこで申し訳なさそうに様子を覗いながら、リディナが入口から声をかけた。

ドアの前でこちらの様子を覗いつつ、声をかけれずにいたようだった。

「み、皆様に、お菓子を焼きましたので……良ければお召し上がりください……」

リディナは、作戦会議がざわざわと続けられる中、クッキーとケーキと紅茶を持って、兵たちに振舞い、軽い会釈をして、部屋を出ようとした。

「レシオン様!本気ですか!」

兵の一人の絶叫に思わず、リディナは振り返って聞き耳をたてた。

「反乱軍とあいまみえる覚悟なのですか?」

兵の一人ユーリイが真っ青になって叫ぶ。

「姫を無事にお守りするにはそれしかないだろう。この船のほかに、ザトが指揮する大型船がある。それに乗って反乱軍とぶつかり、この船はその間に、ジーバーに向かわせる」

レシオンは、兵と船をこの大船から切り離して、反乱軍とぶつかり、足止めしている間に、もうすぐ着くジーバーまで姫を向かわせると言う。

「このままではどの道、反乱軍に追いつかれる。姫を身の危険に晒

すわけにはいかない」

「し．．．しかし．．．」

レシオンは食い下がろうとする部下を鋭い目で睨みつけた。

部下たちはおろおろとしたり、しぶしぶと納得する者とで分れた。

「それでは．．．わ、我々は．．．」

部下たちの目にも、メディン軍が敗れた反乱軍に、今の状況下で勝ち目があるのかわからない。

「兵を志願した以上、危険と戦いは避けられないものであるだろう？」

レシオンは冷たい目でおろおろする兵に問いかけた。

兵たちは、静まりかえった。

「了解しました．．．全ての者たちに指示をします」
そこまで聞くとリディナは正気に戻り、ぱたぱたと走り去った。

部下たちは、真つ青な顔で、のろのろと動きだした。

船は反乱軍に向かわせるため、装備などの点検直しに入った。

兵たちはそれぞれ指示に従って、配置されていた。

*

メーテは少し前から慌しい兵たちの動きと、船の出し入れや操縦士交代など行われていて、騒がしいことに気が付いた。

かなり、人が慌しく動いているようだった。

部屋を出て、様子を覗いながら歩いて居ると、リディナにぶつかった。

「め、メーテ様．．．」

リディナがメーテに追突されて倒れた。

「あ、当たってしまい、申し訳ありません．．．お怪我

「はいですか？」

衝突して行っただのはメーテの方なのだが、リディナはメーテを案じると自分も身を起こした。

「そんなこと良いわ。それに今は私からぶつかつたし、怪我も無いわ。ねえ、先ほどから騒がしいんだけど一体何が？」

問うとリディナは顔を伏せ、何も言わない。

リディナはかなり青い顔をしていた。

「すみませ……ちよつと気持ち……悪い……船酔いした……みたいです……」

リディナは顔を背け、ぐったりとした表情で船の外へ向かった。

メーテは、吐き気に襲われるリディナの背中をそつと撫でると落ち着くのを待った。

しばらくすると、止んだようで、メーテを振り返った。

「メーテ様……お氣遣い……ありがとうございます……」

相変わらず蒼白な顔だったが、立ち去ろうとするリディナを捕まえてメーテはぴしゃりと言った。

「リディナ！言いなさい！！何か知ってるのね？はつきり言いなさい！」

怒ると、リディナは大きく怯え、震える唇でこう言った。

「あ……あの……」

「はつきり言いなさい！」

怒鳴り声に仕方なく、リディナはもぞもぞと言った。

「は……反乱軍……追ってくる……そうです……あのレシオン様は……反乱軍を止めるために、軍を分離して、反乱軍の方へ向かっているそうです……」

「な、なん……反乱軍ってどういうこと？リディナ！聞いたこと全部話してっ！」

メーテは詳しく内容を聞くために、メーテに与えられている船の部屋に戻った。

リディナと共にベツトに腰を掛けて、リディナがレシオンから言うのを止められたという話を聞きだした。

3章 攻防

反乱軍の追手が、メーテの乗る船を追いかけてきているという。レシオンはメーテから反乱軍を引き離すために、軍の分離を行い、メーテの乗る船を安全にドーバーへ向かわせ、別な船で反乱軍の足止めをするという内容をリディナから聞きだした。

メーテの中でまた、夢の内容が広がる。

反乱軍に向かっていくレシオンの姿が……。

いてもたつていられず、メーテはドアに向かって走って行こうとした。

だが、それをみたリディナが手をがっちり握り、離してくれなかった。

「いけません、メーテ様」

抑えるリディナにメーテは声を荒げてこう言った。

「これ以上、反乱軍は私から何を奪うって言うの？……弟を失つて、父様だって、命の危険にさらされていたのに……！無事に父様が城を守ったと言う連絡は来たわ！でも、その後、恋人でさえ死路に出せって言うの？……もう嫌よ！私も戦うわ！そして私も死んだ方がマシ！一人で守られて安全にジーバに向かえと言うの？！大切な人がこれ以上死んで行くななんて嫌！！そんなの嫌！手を離して、リディナ！」

「メーテ様！それ以上身を乗り出しては危険です！メーテ様……お怒りは私も痛いほどわかります……でもどうか、静まりください！」

「嫌よ！」

リディナの制止を振り払い、メーテは船室から飛び出す。

「メーテ様！今向かわれても、足手まといにしかりません」

きつい口調でリディナがメーテを制した。

メーテは、リディナを振り返り、ゆっくりと船室に戻った。

ベットに腰を下ろし、肩を落として座る。

「私も・・・私もメディン様を失いました・・・」

リディナはぼろぼろと泣きだした。

「メディン様が出立される際、私に言い残したことが有ります・・・それは、『俺はリディナの元に帰ってくるけど！大丈夫だけどさ・・・でも、戦いに絶対って約束されるものはないから・・・もし、俺が帰ってこなかったら・・・結構、はねっかえりでしたっけ姉さんなんだけど、ちょっと面白いところあるからさ、姉さんこと・・・面倒見てやってほしいんだよね』って言うてました・・・それが最後の言葉になるなんて私は思ってたんですけど・・・その言葉を守るにはきつと・・・メーテ様を私にできる限り御護りするしかないと思っています！私は剣武道など出来ません！けれども、メーテ様を死路に向かわせるなんて私は命に代えても阻止します！メディン様の遺志と・・・お腹の子と共に！」

それを聞くと、メーテはさらに驚愕した。

「な・・・なんですって・・・」

その時、船は、大波で大きく揺れた。

天候がかなり荒れてきて、大きな波が迫ってきている。

立ちあがっていたリディナは床に倒れた。

「り、リディナー！だ、大丈夫？・・・それ本当なの？リディナ！メディンは子供の事を知っていたの？」

リディナを助け起こすと、弱くリディナは平気です、と言った。

「大丈夫です、心配には及びません。・・・ちよっと今は腕をぶっつけただけです。あの、生意気な口を聞いて申し訳ございません

ん……ですが私は本当に……」

「もういい、わかったわ」

泣きじゃくるリディナをメーテはそつと抱きしめた。

反乱軍の追手がかなり近くまで来ているらしい。

弟の軍を滅ぼしたと言われる雷の奇術……。

この嵐の力もそうだっていうの……？

レシオンは……レシオンは……？

空が光った。

暗雲が立ち込め、暗く厚い雲に覆われた空は、メーテの不安をさらに増加させていく。

メーテはその時、指のリングがまた、不思議な光を放っていることに気がついた。

奇術が落ちて、周囲が雷の力に襲われる。

すると、指のリングが光を放つとメーテの周囲一体を赤い光で覆い、雷の力を無効化していく。

「……雷撃を……吸収してる？」

メーテは目に見えない圧迫する力が、赤い光によって確かに無効化されていることに気がつく、慌てて飛び出した。

「メーテ様！」

リディナが叫ぶが、メーテは船室から飛び出した。

大きく揺れる船にまたリディナはバランスを崩し、立ち上がるとメーテの行った方向を見失ってしまっていた。

メーテは甲板に出るが、海上戦を覚悟したレシオンたちの軍が遠ざかっていくのが見えた。

メーテは、最後に出立した軍兵の船に向かって叫ぶと、その船は気がついて引き返してきた。

メーテの乗る船の側に戻ると、兵の一人、その船の小隊長ユーリイが甲板に出てきた。

「ユーリイ、頼みがあるの。聞いてくれるかしら」

「メーテ姫様の頼みであれば」

ユーリイがもちろんとばかりに頷く。

「私をレシオンの所まで連れて行ってほしいの」

言つとユーリイは真つ青になつて、首を振つた。

「とんでもございません、姫様。レシオン様の部隊は最前列です。姫様を同行させるなんて出来ません。ご伝言であれば、私が責任を持つてお伝えに参ります。どうか船はこのまま、ジーバにお向かいください」

ユーリイはメーテの願いを受けられないと言う。

騒ぎに気がついた小さな軍船に同乗する兵、20人も全て出てきた。

光る指輪をメーテはそつと外して見るが、そうすると赤い光は消えてしまった。

またメーテが指にはめると赤く光り、メーテの周囲を守りだした。

ユーリイもその輝きに気がつくと目をぱちぱちさせた。

「きつとこのリングは私を守るうとしていたみたいなの。でも預けても誰かが使えるわけではない。この周りにたちこめる暗雲の力・それを無効化出来るみたいなの。このままではレシオンは死んでしまう！お願い、誰にも告げずに私をこっそり連れて行って頂戴！」

メーテは必死な思いで叫ぶとユーリイは甲板から母船に向かって梯子を出し、支えてゆつくりとメーテに降りてくるように行った。

「足元、気を付けてください。あとこの船は母船と違い、装備も良くありませんし、船も小さいですから良く揺れます。気を付けてください」

ユーリイが諦めたように言つと、メーテは大きく頷いた。

梯子を片付けて、母船から離れようとした時、母船から声がした。

「メーテ様！」

リディナが喉がはち切れるような声で絶叫していた。

「行って！」

メーテはユーリイに命じるとユーリイはエンジンの速度を上げた。不思議なことに、その船は赤い光に包まれ、母船よりも揺れない

ことにメーテは気がついた。

「こんなに波が荒いのになぜこれだけ揺れていないんだろう」兵たちが近づく反乱軍への距離に装備を固めながらも、首を傾げて騒ぎ始める。

赤い光が強くなっていく。

メーテは目を瞑り、リングに向かって祈った。

母様……母様、力を貸してください。私にも大切な人を守る力をください。

リングは呼応するようにさらに強い赤い輝きに包まれた。揺れずに進んだため、レシオンたちが乗る大型戦闘船に追いついた。

小さな戦闘船にも関わらず、波に揺れず、雷の力を吸収する小型船に反乱軍たちも気がつき、雷撃を向けてきたが、紅い光が吸収し、全く効かなかった。

レシオンたちの軍は、奇術の攻撃に、次々と船を沈没させられ、かなりの苦戦を強いられていた。

倍くらい兵が居たはずなのに、どれだけ兵と船を失ったのかわからないほどだった。

あちらこちらに、壊れた小さな戦艦が見えた。

反乱軍の物も、王国軍の物もある。

だが、反乱軍の大船から放たれる雷撃によって、王国軍の船は無残に沈没させられていて、王国軍の方が不利な状態なのはメーテの目にもはっきりわかった。

このままでは……負けてしまう。

大きな戦闘に入っている状態のようだった。

そこに奇術で狙われている小さな船が、赤い光に包まれて、無事なことにレシオンも気がついてその小船に目を向けた。

その小船は、ユーリイに指揮を頼んだ船だ。

メーテは甲板に出ると、レシオンに大きく手を振った。

レシオンはその姿を捕えると、愕然とした。

「姫様……な、なんてこと……」

レシオンはメーテが大きく手を振る情景に驚愕した。

「今すぐ戻るんだ、メーテ様……いや、ユーリイ！」

レシオンは力の限り叫んだ。

メーテ姫を守るためだけに、捨て身の覚悟で挑んだ戦い。

その場所に姫を連れてくる……なんて。

反乱軍の雷撃がユーリイの小船を狙う。

周囲が光った。

レシオンは、「やめろー」と力の限り叫んだ。

反乱軍の奇術の二発目がユーリイの船を目掛けて飛んできた。

兵たちは怯えていた。

メーテが息を吸って、赤いリングをかざすと、赤い光は船を囲い、無効化された。

メーテがリングを気力を込めて握り直す。

すると、紅い光は、大きな壁となり、周囲の海上、そして上空、全てに広がっていく。海の全体を赤い光が包んでいく。

反乱軍の術が、赤い壁に弾かれて、全く王国軍の元に届かなくなつた。

それを見て、ほっとするとメーテは足の力が抜け、一瞬、気を失うかと思つた。

「メーテ様？」

慌ててユーリイが手を伸ばすと「何でもないわ」とメーテは、起き上つた。

意識を失えば、私はレシオンを守れない。

メーテは気力を振り絞ってリングを強く握つた。

反乱軍は、雷の奇術が赤い壁に無効化されて効かなくなったことに狼狽していた。

反乱軍の奇術を使っていた将が、軍船の甲板に出てきた。

そして、広がる紅い壁に目を巡らすと、目を細めた。

「オフレン様……」

バフガスが心配そうに雷の術を施していた老人、オフレンに声を掛けた。

オフレンは目を細め、懐かしそうに赤い光を眺めていた。

「この赤い力……わしの『紅玉』の力……これを……使えるものが……ドカランに居たのだな……」

オフレンは静かに目を瞑った。

「この力は……リオの力……」

オフレンは雷の術の行使を止めた。

「オフレン様？」

バフガスがオフレンを見ると老人の頬にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「今更ながらに、リオに厳しい修行を課し、ドカラン王子に惚れ、術が身に入らなくなったことを叱咤し、厳しい罰を与えたことを後悔している……わしはそれを謝罪したかっただけだったのかも知れん……だがこの力……バフガス、お前は私に何かを隠しておるだろう？」

「何か、と申しますと？」

「このリングの力は、わしら一族の長にしか扱えぬ力。リオはドカランの王子に誘拐されて、犯されて、その後、2年で死んだとわしに伝えたな……」

「偽りなどありません」

バフガスははつきりと言った。

「では何故、お前はドカラン王を裏切ったのか？」

意外な質問に変わり、バフガスは戸惑った。

「何を申されますか……私は元々オフレン様にお仕えしていました……こっそりリオ様にご同行したのは……」

「……リオ様が心配だっただけで……」

「お前が当時、リオに片恋をしていたのは知っていた……」

・リオを案じて付いて行ったのだろうか？だが、ドカラン王は剣技などまったく使えなかった若き日のお前に剣技や武術を教え、鍛え、

そして今はその子供の一番部下として仕えさせていた。不服ある扱いはなかったはずだ。今さらわしの元に現れ、リオを残虐に死なせたドカラン王へ報復するように求めた。その力を貸してくれと。それは一体何故だったのか」

「そ．．．．それは、リオ様の死なせた王を．．．．」

「今になって許せぬようになった、と？確かに前回の報告では、リオはドカラン王に虐げられて殺されたと言われ、わしも雑兵を集め、この残り少ない命を掛けて術を施し、兵を起こした。他の一族の者を奮い立たせ、全滅するかも知れぬ戦いに挑んだ。だが、私にはこの赤いリングの力でわかる。これはリオの力だ。そして、ドカランの城を守り、私の力を弾いた力。あれもリオの力。これほど強くはない思念の力だったがな。リオが守ろうとする力を感じ、私は軍を引いた。そして、前が言う、ドカランの姫が逃げたという船を追った．．．．しかし、このリングの力は間違えなく生きている力だ」

「間違えなく、リオ様はお亡くなりです！」

バフガスが老人にとりみだした顔で言いきる。

「では、誰か、ということだな。確かにわしには感じる事ができる。リオの力であり、リオではない者の力。もっと若い娘の命を感じる」

目を瞑っていた老人が目を開き、バフガスを振り返った。

「これはリオの娘、であろう？」

老人が問いかけではなく、確定のようにバフガスに詰め寄る。

バフガスは返答に答えられず硬直していた。

「答えずともよい。わしら一族の娘は、確かに子を成せば5年以内に寿命は尽きる。だからわしらの一族は繁栄することなく、衰退していった。だが、わしら一族内ではなく他の血統の者との子を成せば、その子が将来、子を成しても死ぬことはなくなったという。そうやって他族と婚姻するのもひっそりとわしは認めてもきた．．．．表だってではないがな。リオが死んだのはこの子を成したからだ

ろう。リオもわかっていたはずだ、このことは。だから、リオは決して気に沿わぬ者との子は成すまい。無理にというのであれば自害しただろう。リオはそういう子だった」

バフガスはさらに押し黙った。

「わしももう戦う意味は亡くなった。わしが愚かだったのだ。本当はすぐにわかったはずだったのだ、お前の嘘は。しかし、冷静になれなかったのは、わしがリオに対して残す後悔の念だった。それがさらにこのような過ちになってしまった……死んだ一族の者、そして、ドカランの兵たちに詫びるためにも、此処で自決しよう」

老人は短い懐剣を腰から抜き、首に突き立てようとした。

「オフレン様……！おやめください……」

周囲の部下と、バフガスが停止するように声を掛けると、そこに「反乱軍の船だ」と喚く声が大きく響いてきた。

若い男の声で老人は振り返った。

どうやらドカラン軍の船がこちらの船を見つけ、兵たちが叫んだようだった。

老人が顔を上げると、ドカランの船が一带を包囲していた。

一族の術が効かなければ、船の装備も、ドカランには勝てるはずのないことはわかっていた。

紅い光に包まれて雑兵たちは、正気を取り戻し、ぽかんとしていた。

その中で中心にある一番大きな船に乗る若い男が指示を出していた。

その男は、リングの力で赤く染まる少女を船に乗せると真つすぐと、オフレンの乗る船に向かってきた。

「反乱軍の首謀者たち、ですね」

大きな船は、オフレンたちが乗る船の正面に回ってきた。指示を出している若い男が、オフレンたちを睨みつけて、そう言った。

オフレンとバフガスを見遣ると、さらに兵たちに指令を出していた。

「違う。包囲せずともよい。わしはいつでもこの命を断とう。だが、わしが指揮していた雑兵や一族の者の命を保証してほしい。わしの指揮がなければ戦わぬはずだ」

老人は答えて、若い男の横に居る赤い光に包まれた少女に目を向けた。

「……その少女、名を何という？」

老人は、紅い少女に名を尋ねた。

「答えるギリなんてないわ！……横にいるあなたは……確かバフガスね。なぜ弟を裏切ったの！？」

高慢な姫は名を答えず、バフガスに目を向けた。

「ほ……そうか、リオに子供は二人おったのだな……」

老人は遠い目をして反応した。

バフガスは、逃げようとうろたえた。

「弟は……弟は、あなたたちの将の一人と戦って……殺されたそうね」

老人はそれを聞いて、表情を変えた。

そして、うつすらと目を瞑り、呟いた。

「一族の中でもわしによく仕え、術力が強く、剣術も仕えたワンローがドーバーにて、相手の将を打ち取って、死んだ。わしはあの、ドーバーの悲劇のような焼けただれた城塞に大量の死体が転がるあの光景を招いた時には、この戦が終われば戦いで死なずとも自らも命を絶つ覚悟が出来た。その戒めを胸に、ワンローの軀を自らこの手で埋めた。わしに仕え、死んでいったものへのせめてもの償いだ。しかし、あの戦いでわしは、リオの子を失ったのだな……」

老人が考えにふける中、隙について、バフガスは、甲板から海に飛び込んだ。

ドカラン軍が弓や短剣を投げるが、器用に避けられた。

それを見た、レシオンが追って海に飛び込んだ。

「レシオン?!」

メーテが驚いて叫び、レシオンが飛び込んだ海に視線を向けた。
レシオンは泳いでバフガスを捕まえ、船体の下の鉄板にバフガスの頭を叩きつけた。

「何故、メディン殿下を裏切った?」

レシオンはバフガスを捕え、迫った。

素早く剣を抜いて、首に突き付けた。

「……………メディンはいつとりオ様の子だ! そんなの許せるわけがない! そこに居る姫もだ!」

そう言うとき懐から弓を出し、メーテを狙おうとした。

レシオンは素早くそのバフガスの手を捕えた。

掴まれた事で方角が狂って放たれた弓がカキンという音を出して船の側面に当たり、海に落ちた。

周囲にはいつの間にかド克蘭兵が集まり、バフガスを捕えた。

レシオンは、バフガスを縛り、兵たちに見張らせると、敵船の老人に目を向けた。

老人はすでに戦いのことなど頭がない、晴れやかな表情で空を見ていた。

「そうだったのか……………」

老人は真相全てがわかり、安堵した表情でつぶやいた。

「もう、全てはわかった。守りたかった大切な娘の子供の命を落としてしまった愚かな老人だったのだな。わしはこの命をド克蘭と死んでいった一族の者、そしてメディンに詫びるために天に還そう」

オフレンに仕える者が止めようと近づくの老人は術で遮った。

誰に向けたのではなく天を仰ぎ、そう言うとき老人は自らの喉を差し、その命を懐剣で絶った。老人が使った術の効果が切れた。

空が晴れてゆく。

嵐が嘘のように去り、海は凪いでいった。

「オフレン様……………」

術士たちが、老人の側に寄った時には、老人の命は、こと切れていた。

残る指揮を失った雑兵と術士たちを捕えて、メーテたちは帰還した。

国民も歓喜に包まれ、メーテは、ドマに「帰って来てくれた」と抱きついて歓迎された。

反乱軍を鎮圧した歓喜に包まれ、ドカラン国は平和を取り戻した。

*

捕えられた地下牢。

何人もの兵士に厳重に見守られ、牢屋に込められたバフガスは、翌日にも処刑されることが決まっていた。

そこに、カツンと着く音が響き、バフガスは靴音が近づいてくる方を見遣った。

「レシオン……」

現れた人物の名を思わず呟いた。

「何だ？明日処刑される哀れな男の見物か？」

すでに、中年と化した男はレシオンから目を背けて唾を吐いた。

「一歩間違えば……俺だったかも知れないからね」

レシオンは真つすぐバフガスの方を見て言った。

「ふん、あの姫のことかい？でもお前は両想いみたいじゃないか。俺みたく目の前で違う男に掠められることなんてないだろ。あの姫がお前を選び、そして国王様が認めたら、お前の元にはこの大国の支配権が転がり込んでくるじゃないか。俺とは違うね」

皮肉れた口調で牢屋の中年はそっぽを向く。

「そんなものが欲しいわけじゃないさ……それに、姫が王国を

継ぐことは出来ても、俺は継ぐと言うことはない……姫がほかの人と婚姻することもあるだろうしな」

レシオンは手に持っていたコインを投げて、こう言った。

「このコインが裏、表、どちらかである確率は二分の一」

コインは地面にカラン、という音を立てて落ちた。

「それと、確率論でいうなら変わらないだろう。王妃様がドマ様と会う前に、一族の男が告白していたとしたら、その者と婚姻していた可能性も……」

そう言うと、バフガスは「コイン遊びなんか例えられたくないね。人の気持ちは二分割に出来るもんじゃない」と言った。

レシオンはバフガスに視線を戻した。

「俺は聞きたいことが一つあった。何故、メディン殿下を……そしてドマ様を裏切ったのか。本当に19年前に亡くなった相手への恋心に今更、火を付けて、メディン殿下を裏切ったのか？」

そう言うと、牢屋の男は「お前に何がわかる！」と怒鳴り散らした。

「お前に何がわかる？俺の苦悩がわかるって言うのか？」

かっとなった表情で、男は怒鳴り散らしていた。

「一体、お前になにがわかる！わかってたまるか」

牢屋の男をレシオンは静かに見た。

「わからないね。俺であれば確かに苦悩は感じるかも知れないが、亡くなられた王妃の子を守ることもまた、天命だと思うからな」

レシオンはさらりと言った。

「それに、ドマ様はあなたを邪険に扱うことなどなかった。それどころか、他族の良く分らない馬の骨に、自ら剣術を教え、十分な位を与えて、側に置いた。それに恩はなかったのか？」

レシオンは相手を見据えた。

「……感じた……さ」

相手の男は以外にも、意外な言葉を返してきた。

「大きな男だと思ったよ。俺はリオのことしか頭になかった。リオ

以外なんてどうでもよかった。そんな俺にも優しく接し、国民の期待にも応じ、期待される国家を作り、そして軍事においては誰もが勝てぬほど強い国家を目指し、自らも世界一の剣技を持つ男。俺には何一つ勝てないさ。リオを殺したのはあの男だ。でも、俺はその男に何一つ勝てるものはなかった。・・・そんな僻みっぽい感情しか向けられなかった俺を信じ、国を継ぐ大切な自らの息子を預けると言った。・・・あの瞬間、恨みなんか消えたよ。もうこの男には俺は敗北し続けるしかないんだと。・・・この男はリオが惚れる価値が有る男なんだと」

ふと、中年の男は、レシオンに顔を向けた。

「でも。・・・これを見たんだ。・・・。・・・」

中年の男は、一通の手紙をポケットから出した。

その手紙を、レシオンに投げつけた。

レシオンが開いて、中を見ると、美しい女性の達筆でこう書かれていた。

私が死ぬ運命なことはあの人は知らない。けれど私はあの人を怨むことはない。

誰よりも愛した人との子供を成して死ねるのなら、それ以上の幸福などありません。

ただ、私は病死する前に、自害します。

この事は、誰にも伝えぬよう。バフガス、あなただけの胸に秘めて欲しいのです。

いずれゆつくりと病死をすれば、あの人は私たちの一族の運命を知り、要らぬ悲しみを負わせてしまうかもしれない。それであるなら、いつそ、服毒して死にましょう。

バフガス、この事は誰にも伝えぬよう。こういう手紙を残したのには、一つお願いがあるのです。以下の文を私の父、オフレンに伝言をして欲しいのです。

黙って一族を抜け出たことを今でも心残りに思っています。けれども後悔はないのです。私は幸せでした。

一族の王、オフレン様、どうか、このドカランの繁栄を祈ってください。

私の力を継いでいると思われる娘、メーテに一族の長として預かりましたリングを形見として預けさせておきます。どうかこの国を・・・メーテとメディンをお守りください

「これは・・・？」

「リオが書いた手紙だ。死ぬ時、受け取った。・・・俺はこれを受け取って・・・しばらく、開封しなかった。捨てた未練を開封するような気分だったからだ。2年半前、メディン殿下が冠式をされた際、『母の事、覚えてることが有れば何でも教えてくれ』と言われて、ふと封書の事を思い出した。もちろん殿下にその事は言わなかったけれど、実は服毒した・・・なんてことが書かれていて・・・リオは死ぬまで・・・いや死んでからも国王を守ろうとしたんだ・・・。もしかすると服毒なんてしなれば・・・望みは薄いけれど生き続けられたかもしれない命をリオは捨てた。それを俺が知った頃には、ドマ様も一族の者が出産で死ぬことを知ったみたいだけだな。・・・俺は手紙を開封して一族の事を浮かべ・・・17年経ってから・・・そう、一昨年、ようやく俺はこっそり集落に帰り、オフレン様に会った。俺はリオが服毒した、なんてことを口に出せず、・・・このドカランの国王に強姦されて死んだって伝えたよ。・・・やっぱり何処か燻ぶるやつかみと服毒したなんていう事がそんな言葉を出してしまった。後には後悔したが、もう、止まらなかった。オフレン様は、雑兵を集め、一族の者を死ぬ覚悟で団結させて、ドカラン国を墮とすことを考案した。オフレン様はずっと17年前に消えた17歳の少女が、どう生きているのかを知らずに過ごし、もうこの世にそんな形で居なくなつたと知ると、オフレン様は奮い立ったさ・・・俺は雑兵でも落とせる防御の弱い内通ルートや、監視や兵が強い場所にオフレン様の術を使うように教えて・・・始まってしまった。・・・お前も不思議だと思っ

たろう、俺が剣を持って戦いを挑んだりしなかったことを。俺はもう、何を怨んでるのかわからなくなり、内通しながらもうるたえて……俺は、自分の嫉妬の感情だけで、リオが望むことの反対のことを仕出かしてしまった……リオがもつとも望んでいなかった事を……だからいつも葛藤していた……

……

そこにカツン、という石がぶつかる音がした。

はっと二人が振り返ると、そこには、ドカラン王、ドマが立っていた。

「ドマ様」

レシオンが驚いて叫ぶ。

「すまぬ、全て聞かせて貰った。バフガス」

「ドマ様……」

バフガスはドマを驚愕した顔で見返した。

「私とリオだけのことであれば、お前を逃がしてやることも出来る……ずっと、気に病んでいたのだな。私もリオの死は、不自然だと思っていた。服毒だったのだな……私はあの若い日に、リオの事をわかっていたとしたら……そしてお前の立場だったらと思うと、確かにやりきれない思いがする。だが、今回起こした戦いの罪は重い。死んだ一族の者、そして、メデインのことを考えるとお前を此処から出してやることは出来ない」

苦悩した顔でドマはバフガスに告げた。

バフガスは目を睜った後、ふっと笑い「相変わらず、大きな方です……」と言った。

「すまぬ、バフガス。お前が起こした戦いは、ドカラン国の者の大勢の命、そしてメデイン、そしてリオの父の命まで奪ったもの。私は国王として、お前を刑に処するしかないのだ」

バフガスはそれを聞くと諦めた乾いた笑いを浮かべた。

「ドマ様、私はあなたにお仕え出来たことを今は誇りに思うことが

出来ます。こんな罪人に対して詫びることが出来る国王など、他にないでしょう。私は、メディン殿下、そしてドカランの者、そして一族の者、オフレン様。全てに詫びる思いを持つことが出来ました」

バフガスはそう言っていると、牢の端で立っていた見張りを蹴り、持っていた長剣を奪った。

「何を！バフガス！」

牢越しに、ドマを守る形でレシオンは剣を抜いて、バフガスと向かい合った。

バフガスはその長剣を持ち、自分に向けて差した。

「バフガス?!」

慌てて見張りに牢を開けさせ、レシオンとドマが中に入った。

「明日には処刑される身ですが……それより前に自決することをお許しください……メディン殿下……今度こそ……心よりお仕え……致しま……」

バフガスはそう言っていると、息を引き取った。

牢の中には、中年の男の赤い血液が広がっていた。

「……レシオン、この後、頼むな……私は部屋で休む……」

ドマがそう言っていると「はい」とレシオンが頷いた。

バフガスがレシオンに投げたりオの手紙をドマはそっと受け取った。

ドマはその手紙を、自室に戻って、この戦いでバラバラに切り取り、破片も汚れて煤けてしまったりオのマントと共に燃やした。

その灰を、城の屋上からそっと風に飛ばした。

レシオンは見張り兵と共に、バフガスの遺体を片付けた。牢から見張り兵も引き上げ、何事も無かったように静まり返った。

エピローグ

朝日が差し込んでくる。

ベットの上で、メーテはうーん、と伸びをした。

「もう、あしやですか？おかあしやま」

隣で寝ていた小さな娘、リナがぼんやりと寝ぼけながら欠伸をした。

「うん、そうね、いらっしやい。今日はとても天気良くて遠くまで見えるわ」

そう言い、カーテンを開け、窓を見ると、眼下にはドカランの街、そして山、遠くの村まで見渡せた。

「うわあー、今日は遠くまで見えるね。おかあしやま」

「そうね、リナはこれから・・・ずっとこのたくさんの人たちの生活を支えていかなければならない人間にならなければならないのよ」

メーテがそう言うと、リナは首を傾げた。

メーテはそつと笑うと、リナは「ユーリンと遊んでくる」と言つて部屋を飛び出した。

リナと年がそう違わないユーリンは、メーテに仕える侍女の子であり、リナにとっての遊び相手となっていた。

メーテが着替えを終えると、ドアをコンコンと叩いて、リディナがハーブティを持ってきた。

しばらく、争いがなく平穏で豊かな日々がドカランには流れていた。

*

ドカラン民族はその後栄え、繁栄を続けた。

南コーザ大陸の中で、ジーバ国とドカラン国以外の領土は駆逐さ

れ、2大勢力国となった。それからドカランは500年を過ぎた頃、その一体で巨大な地震に襲われ、死者200万人を出す、大きな被害となった。

以来、産業は衰退し、活気を失い、兵を失い、復興に努力を重ねる王、ロフェンの頑張りも虚しく、地震の爪跡はドカランを恐慌状態に陥らせた。

兵の士気さえ失ったドカラン王国は、ジーバー国に攻め落とされ、570年の国の歴史に幕を閉じた。

（後書き）

さてさて、予想外長くなっちゃった。

最後の「何も語ってないじゃん？こいつら誰の子よ？」
って思ったと思います。

それはもう

「この子はメディンとリディナの子だ」とか「メーテとレシオンの子だ」とか考えてくださって結構ですよ。

私もそのつもり・・・なのですが、語っていないのは「そうではないかも？」っていう意見が有っても良いかなと。

実はレシオンではなく別な人とメーテの子とか、

実はメーテが養女として、リディナの子をメーテが育ててるんだ、とか、

侍女の子供って言うのは、リディナが産んだ子ではなく、別な侍女の子が出てきてるんだとか思ってた良いかな、と。

また、もし、メディンとメーテの二人の子孫が居るとしたら王位継承はどちらの子がしていったのでしょうか？最後の王であるロフェンはどちらの子孫だと思いますか？

その辺は、読んでいる方の想像部分を取って置こうと思ひまして、あえて私が語ることをしていません。

私があえて書きたい部分でもなく、いろいろと読んでいる方の自由な発想で良いかと思っています。

どっちでもいいかなと（↑おい）

この話しても結局は「争いは何も生まない」を私は主張したいのですが、簡易な話であるがために伝わりにくいかもしれません。

平和な世に生まれてくる子たちの笑顔が守られる世界が現実でもあると良いと思っています。

シナリオの中でも明るくて悪戯っ子なメディンを犠牲にしたことで、ドマやメーテ、リディナの心には、「大切なものを守りたい」という熱い思いが広がったと思います。

それによって、ドマやメーテ、リディナはまた、それぞれの行動をしていくことになったのですから、早期で死んでしまうメディンも立派なメインキャラになっています。

また、反乱軍の敵さん方もただ倒せば終わりと言う設定ではありません。

悪魔だから倒せば終わりということは、やっぱりないと思うんです。だからこそ、老師オフレンを「こんちきしょー」とただ憎むキャラというような設定にはしていません。

きっと戦いが起こるってそういうことなんだと思います。

でわでわ。

ドカランをこれで終了します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4345k/>

ドカラン王国の反乱

2010年10月8日15時08分発行